

# 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発

—信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討—

横嶋 敬行\*, 内山 有美\*\*, 内田 香奈子\*\*\*, 山崎 勝之\*\*\*

(平成28年6月8日受付, 平成28年12月6日受理)

## Development of the Paper and Pencil Version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children (SE-IAT-C) :

### Investigation of the Reliability and Validity Utilizing Rosenberg's Self-Esteem Scale and Assessment of Children by Teachers

YOKOSHIMA Takayuki \*, UCHIYAMA Yumi \*\*,  
UCHIDA Kanako \*\*\* , YAMASAKI Katsuyuki \*\*\*

This study aimed to develop the paper and pencil version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children (SE-IAT-C) and examine its reliability and validity. In Study 1 in which 581 4th- to 6th-grade elementary school children participated, a significantly positive correlation between implicit association test blocks was demonstrated. In addition, implicit self-esteem and explicit self-esteem (Rosenberg's self-esteem scale) were found to be uncorrelated. These results suggested that the SE-IAT-C has a test-retest reliability and discriminant validity. In Study 2 in which 7 school teachers participated, 12 high implicit self-esteem children were assessed as children having low anxiety, low aggression, and high autonomy by their teachers. On the other hand, 11 low implicit self-esteem children were assessed as having high anxiety, high aggression, and low autonomy. These results were consistent with the characteristics of high and low implicit self-esteem revealed in prior studies, suggesting the criterion-related validity of the SE-IAT-C.

Key Words : implicit association test, implicit self-esteem, explicit self-esteem, reliability and validity

## 序 論

### 1. 自尊感情の定義と研究の動向

自尊感情 (self-esteem) の概念は人の成長や発達, 心身の健康や適応にとって重要な心的特性として広く知られている。自尊感情の定義として, 最も広く知られているのは Rosenberg (1965)<sup>(1)</sup> の定義であろう。彼は, 自尊感情を自己イメージの中核的な概念であり, 自己に対する肯定的あるいは否定的な態度と表し, それは他者と比較することによって抱く優越感や劣等感ではなく, 自己への尊重や自己価値の程度を評定することであると述べている。また, 彼はその著書の中で自己に対する評価の感情には, 「とてもよい (very good)」と「これでよい (good enough)」の2つが存在し, 自尊感情には good enough の感情が大切であると述べている。good enough の感情は, 今ある自己のありのままを認める自己受容に近い概念で

あると考えられているが (沢崎, 2010)<sup>(2)</sup>, Rosenberg の意図するところは, 自己の欠点を克服しようとする態度が含まれるという点で自己受容とは異なるものであると考えられる。彼の定義は, 開発された尺度とともに, 自尊感情研究で広く用いられてきた (Schmitt & Allik, 2005)<sup>(3)</sup>。

自尊感情が健康・適応にとって重要な役割を担っていることは数多く報告されている。例えば, 自尊感情が高い者は, 不安や抑うつを抱える者が少なく (Tennen & Herzberger, 1987)<sup>(4)</sup>, 人生に対する満足感が高い (Diener, 1984)<sup>(5)</sup>。また, Davies & Brember (1999)<sup>(6)</sup> は, 自尊感情と学力との間に正の関連があることを報告している。こうした知見を背景に, 学校教育においても, 子どもの自尊感情を育てる試みは盛んに行われている。東京都教育委員会では, 「東京都教育ビジョン (第2次)」において, 「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を推進計画に位置づけ, 平成20年度から5カ年計

\* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

\*\* 四国大学生生活科学部児童学科 (Department of Pedology, Faculty of Human Life Science, Shikoku University)

\*\*\* 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 (Graduate School of Education, Naruto University of Education)

画の研究が展開されている（東京都教育委員会，2013）<sup>(7)</sup>。しかし、一方で、高い自尊感情が心理的不適応を引き起こすケースも報告されている。こうした矛盾を受け、自尊感情の研究は適応的側面と不適応的側面に焦点が当てられ、細分化している。

Kernis（2003）<sup>(8)</sup> は高い自尊感情の矛盾を安定して高い自尊感情（secure high self-esteem）と、脆くて、かつ高い自尊感情（fragile high self-esteem；以下、脆弱な高い自尊感情）の2つの側面から説明している。前者は適応的性質をもち、後者は不適応的性質をもつと論じられ、そうした性質の違いは自尊感情の「変動性」、「随伴性」、「防衛性」、「潜在性」の観点からまとめられている（Goldman, 2006）<sup>(9)</sup>。そして、それぞれの領域については、多くの研究者が実証的研究を展開している。

まず、自尊感情の変動性の観点は、状態自尊感情の研究から示された。自尊感情が高い者の中には、安定して自尊感情が高い者と、不安定な者がいることが明らかにされている。そして、不安定な高い自尊感情を持つ者は、安定した高い自尊感情を持つ者と比較すると、怒りや敵意を抱きやすく（Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989）<sup>(10)</sup>、抑うつが高い（Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991）<sup>(11)</sup>。また、日々の肯定的あるいは否定的なイベントの影響を受けやすく（Greenier, Kernis, McNamara, Waschull, Berry, Herlocker, & Abend, 1999）<sup>(12)</sup>、肯定的な評価を好む一方で、否定的な評価に対して防衛的になる傾向があり（Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993）<sup>(13)</sup>、公的自己意識が高い（Kernis, Grannemann & Barclay, 1992）<sup>(14)</sup>。

次に、自尊感情の変動性の要因が追求される中で出てきた概念が、自尊感情の随伴性から規定される随伴性自尊感情（contingent self-esteem）である。随伴性自尊感情とは自己価値の感覚が他者との比較や社会的な成功・失敗など（例えば、学業やスポーツに優れている、有名である、魅力的であるといったこと）の外的な基準に依存して生じる感情であると論じられている（Deci & Ryan, 1995）<sup>(15)</sup>。一方、Crocker & Wolf（2001）<sup>(16)</sup> は、人はもともと、必ず何らかの事象に自己価値を随伴させているものであり、随伴する対象は個々人によって異なると述べている。Kernis（2003）<sup>(8)</sup> も、外的基準や他者との比較に依存した自己価値は変動しやすい不安定な性質を持ち、それに起因する高い自尊感情は脆弱な自尊感情であると述べている。

例えば、随伴性自尊感情が高い者は、課題の失敗場面や他者からの拒否場面に遭遇すると、自尊感情が低下しネガティブな感情が高まる（Zeiger-Hill, Besser, & King, 2011）<sup>(17)</sup>。また、自己価値が随伴する領域が脅かされた時には、ネガティブな感情を感じると同時にその事象に対して敵意をもった反応を示すことが分かっている（Vonk & Smit, 2012）<sup>(18)</sup>。自己価値の随伴の要因は、自己概念の貧しさにあることが指摘されている。自己概念が貧しい

状態であると、それを補うために人は特定の評価情報に強く依存し、その特定の評価情報からの影響をより強く受けるようになる。そして、その結果として、不安定な自尊感情を抱くようになると考えられている（Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavalley, & Lehman, 1996）<sup>(19)</sup>；Kernis, Whisenhunt, Waschull, Greenier, Berry, Herlocker, & Anderson, 1998）<sup>(20)</sup>。

## 2. 質問紙法の持つバイアスと潜在的領域の心理測定

脆弱な高い自尊感情に関する「防衛性」と「潜在性」の知見は、質問紙法を用いた研究の問題点と非意識領域<sup>(注1)</sup>の心理測定とともに触れていくことになる。自尊感情に関する実証研究の多くは、自記式の質問紙を用いて行われてきた。しかし、そこには共通のバイアスが存在する。代表的なバイアスは、社会的望ましさ（social desirability）である。質問紙法によってパーソナリティを測定する場合、調査対象者が自分を社会的に望ましい姿で見せたいと反応してしまうバイアスがかかることがある。この社会的望ましさには、自己欺瞞（self-deception）と印象操作（impression management）の2側面がある（Paulhus, 1983）<sup>(21)</sup>。自己欺瞞は、本来の自分の姿とかけ離れているにもかかわらず、本当の自分の自己像であると信じて無意識的に社会的に望ましい回答を行ってしまうことである。印象操作とは、故意に社会的に望ましく回答し、本当の自己像を偽って答えることを意味する。さらに、このような現象は、「動機」と「機会」が決定要因となっていると考えられている（motivation and opportunity as determinants model; Fazio & Towles-Schwen, 1999）<sup>(22)</sup>。つまり、「社会的に望ましい回答をしたい」、あるいは「謙虚な回答をしたい」という「動機」と、回答を改ざんする「機会」の2つが、回答を歪ませる決定要因となっている。質問紙はこの両方の要因を排除することが難しい。自尊感情は社会的望ましさの自己欺瞞との間に正の相関があり（谷, 2008）<sup>(23)</sup>、そうした防衛性の高い者は、自己に対する否定的な感覚を認めたがらず、一部偽りの自尊感情が測定値に反映されてしまう。

こうした影響を受けずに測定を行うことを目的として開発された非意識領域の測定法の1つに、潜在連合テスト（Implicit Association Test; Greenwald & Banaji, 1995）<sup>(24)</sup>；以下、IAT）がある。IATにはPC版と紙筆版が存在する。PC版は画面上に連続して提示される刺激（文字や写真、絵など）を右か左へ分類する課題を行い、その処理速度を測定するのに対して、紙筆版は限定された時間の中で提示される刺激を左右に分類し、その遂行量を測定する。刺激は、測定対象（カテゴリー）と感情価（属性）の2種類に分けられる。カテゴリー刺激は、測定対象に関する刺激と、その対となる概念に関する刺激の2組で構成される（e. g., 人種に対する偏見を測定するIATであれば、

「白人」に対して「黒人」が用いられる)。そして、属性刺激はポジティブに関する刺激 (e. g., うれしい, うつくしい) とネガティブに関する刺激 (e. g., きたない, くさい) が設定される。IAT によって測定される数値は、測定対象の概念と感情価 (emotional value) との潜在的な連合の強度を表し、潜在的態度 (implicit attitude) であると考えられている (Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott, 2002)<sup>(25)</sup>。潜在的態度とは、「過去に経験してきた社会的な事象に対する好意的あるいは非好意的な感情, 思考, 行為の痕跡であり, 内省によって確認できない (あるいは正確に確認することができない) 態度」(p. 8) と定義される (Greenwald & Banaji, 1995)<sup>(24)</sup>。それに対して、質問紙などを通じて意識上で内省を行うことで測定される指標は顕在的態度 (explicit attitude) であると位置づけられる。IAT は、調査協力者が何を測定されているのか気づきにくく、気づいていたとしても意図的な改ざんを行っていくといった特徴を持つことから、PC 版・紙筆版ともに社会的望ましさからの影響を受けにくい (Egloff & Schmukle, 2002)<sup>(26)</sup>。これは、自尊感情においても同様の結果が報告されている (藤井・上淵, 2010)<sup>(27)</sup>。また、自尊感情の概念を測定した PC 版と紙筆版の IAT は、互いに正の相関を示すことから、比較的共通の概念が測定されると考えられている (小塩・西野・速水, 2009)<sup>(28)</sup>; 藤井・上淵, 2010<sup>(27)</sup>。さらに、IAT は測定方法そのものの信頼性の精度が高く、測定する構成概念によらず、この測定方法を用いることで一定の信頼性が得られることが分かっている (Greenwald & Farnham, 2000)<sup>(29)</sup>。Bosson, Swann, & Pennebaker (2000)<sup>(30)</sup> では、7 種類の自尊感情に関する潜在的態度の測定方法を比較する中で、IAT は比較的高い信頼性を持つことが報告されている。

IAT によって測定される自尊感情は潜在的自尊感情 (Implicit Self-Esteem; 以下, ISE) と言われる。これに対して、質問紙で測定される自尊感情は顕在的自尊感情 (Explicit Self-Esteem; 以下, ESE) と呼ばれている。自尊感情を測定する IAT は (以下, SE-IAT), 自己を表す刺激 (「自分」「私」など) とポジティブ刺激および他者 (自分以外) を表す刺激 (「他人」「他者」「あれは」「それは」など) とネガティブ語の連合の強度と、他者 (自分以外) を表す刺激とポジティブ刺激および自己を表す刺激とネガティブ刺激の連合の強度との差を算出することによって測定される (Greenwald & Farnham, 2000)<sup>(29)</sup>。ISE は非意識的であり、自動的であり、継続的かつ過剰に学習 (overlearned) されることによって形成された自己評価 (自己に対する肯定的・否定的な連合) であると考えられている (Zeigler-Hill, 2006)<sup>(31)</sup>。

また、ESE と ISE は必ずしも一致しないことも明らかにされている。まず、IAT で測定される ISE は、Rosenberg の自尊感情尺度で測定される ESE と無相関であること

が分かっている (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003)<sup>(32)</sup>; Zeigler-Hill, 2006<sup>(31)</sup>。そして、不一致の中でも、高い ESE を持つ一方で低い ISE を内在させている状態は不一致な高い自尊感情 (discrepant high self-esteem) と呼ばれ、脆弱な高い自尊感情の要因の 1 つとして注視されてきた。不一致な高い自尊感情は、自己愛 (narcissism) や内集団バイアス (in-group bias) が高いことが報告されている (Jordan et al., 2003)<sup>(32)</sup>。また、低い ISE の者は学業成績や容姿、他者からの承認、他者との比較といった外的要因への自己価値の随伴と関連を示す (Jordan, Spencer, & Zanna, 2003)<sup>(33)</sup>。そして、低い ISE の者は ESE が不安定なことも明らかにされており、高い ISE の者が最も安定した高い ESE を持つことが報告されている (Zeigler-Hill, 2006)<sup>(31)</sup>。これは、低い ISE の状態が特定の領域への自己価値の随伴を促してしまうことや、随伴の末に形成された脆弱な高い自尊感情 (高 ESE・低 ISE) が、不安定な性質を持ち、心理的不適応を引き起こすことを示唆している。

### 3. 適応的な自尊感情の概念と学校教育への ISE の知見導入の必要性

こうした知見をまとめて、Goldman (2006)<sup>(9)</sup> は、脆弱な高い自尊感情と安定して高い自尊感情の性質を以下のように総括している。まず、「脆弱な高い自尊感情は、(1) 自己価値の感覚を形成する文脈において、短期間の間に変動すること (i.e., unstable), (2) 特定の結果の達成に依存すること (i.e., contingent), (3) 自己価値の潜在的感覚 (implicit feelings) と不一致になること (i.e., incongruent), (4) ネガティブな自己価値の感覚を受け入れることを避ける姿勢が反映されること (i.e., defensive)」(p. 133) とまとめられている。一方で、「安定した高い自尊感情は、(1) 日々の経験からくる短期的変動が少ないこと (i.e., stable), (2) 特定の結果への達成によるものではなく、心理的欲求の中核 (core psychological needs) となるものを満たすことで生起すること (i.e., true), (3) 自己価値のポジティブな潜在的感覚と一致していること (i.e., congruent), (4) ネガティブな自己イメージを進んで受け入れること (i.e., genuine)」(p. 133) と述べている。

Kernis (2003)<sup>(8)</sup> は、こうした安定した自尊感情を適応的な最良の自尊感情 (optimal self-esteem) として概念化し、最良の自尊感情の適応的機能の中核を担う要素は本来性 (authenticity) にあると提唱している。本来性とは、「自己の日々の活動において、ありのままの自分自身あるいは自分自身の中核を成すものの働きが妨げられていないことに特徴付けられる」(p. 13) と説明される。

本来性に関する研究は、伊藤・小玉 (2005)<sup>(34)</sup> が本来性から来る感情的感覚を本来感 (sense of authenticity) と定義して尺度を開発している。それによると、本来感は



抑うつ・不安、不機嫌・怒り感情、無力的認知・思考との間に負の相関を示している。また、対人関係性における閉鎖性・防衛性や他者依拠には負の相関を見せ（伊藤・小玉, 2006b）<sup>(35)</sup>、自律性と正の相関を示す（伊藤・小玉, 2006a）<sup>(36)</sup>。一方、本来性を行動的側面から捉えた尺度である本来感目録（authenticity inventory）を用いた研究では、本来性は随伴性自尊感情と負の相関を示し、高い本来性は自尊感情（ESE）の安定性と関連を見せることから、本来性は脆弱な高い自尊感情よりも安定して高い自尊感情とより強く関連するものである考えられている（Goldman, 2006）<sup>(9)</sup>。

また、Deci & Ryan（1995）<sup>(15)</sup>では、安定した高い自尊感情のような適応的な自尊感情を本当の自尊感情（true self-esteem）と概念化している。本当の自尊感情とは、有能さ（competence）、自律性（autonomy）、関係性（relatedness）といった内発的動機づけを左右する基本的欲求（basic needs）が満たされることで成り立つものであり（Moller, Friedman, & Deci, 2006）<sup>(37)</sup>、外的基準や他者との比較に依存した自己価値の感覚ではなく、自分らしくいられることで自然と生起する自己価値の感覚（満足感や充足感など）であると論じられている（Deci & Ryan, 1995）<sup>(15)</sup>。そのため、本当の自尊感情が高い者は、その性質上、本人は特にその自覚はないと述べられている。山崎・横嶋・内田（印刷中）<sup>(38)</sup>では、Deci & Ryan（1995）<sup>(15)</sup>の理論との対比・整理を行いながら、意識と非意識の構造も視野に入れて、自尊感情の適応と不適応の概念の再構築を行っている。そこでは、随伴性の強い自尊感情を「他律的セルフ・エスティーム（heteronomous self-esteem）」とし、一方で、何かに随伴することのない「自己信頼心」「他者信頼心」「内発的動機づけ」が相互に関連しながら一体となって形成される自尊感情こそ、自律性へ寄与する自尊感情であると論じ、「自律的セルフ・エスティーム（autonomous self-esteem）」の概念を提起している。そして、適応的な自尊感情の測定は意識的コントロールの影響を受けない、非意識領域の測定が必要であると論じている。

こうした知見を総括すると、自尊感情の適応的側面と不適応的側面は次のような関係にあると考えられる。まず、適応的な自尊感情とは、外的基準や他者との比較に随伴するものではなく、本来性（あるいは基本的欲求）といった要素が満たされることで生起する自己価値の感覚であり、顕在的にも潜在的にもポジティブな自己価値の感覚を抱えていることに特徴づけられる。しかし、ESEが高いことは自尊感情の適応的な状態を担保するものではなく、自尊感情の適応的性質はISEに起因するところが大きい。つまり、高いISEを抱えていることが、外的基準へ随伴することのない、安定した、適応的な自尊感情の根幹を成している。そして、その測定には非意識領域の測定方法を用いなければならないと考えられる。

こうしたISEの影響力の強さは、潜在的態度の影響力の強さとも一致する。ESEとISEの不一致については、人の情報処理過程の2過程モデル（dual-processing model）から説明される（e.g., Zeigler-Hill & Jordan, 2010）<sup>(39)</sup>。これは、人間の情報処理の過程には、意識を介する統制処理と意識を介さない自動処理の2種類があるという理論である。後者は非意識（潜在的態度）の人の活動への影響を指す。近年の研究では、この非意識が人間の認知・思考・行動に強い影響力を持つことが数多く報告されており、人間の行動の9割は非意識が支配していると言われるほどである（e.g., Mlodinow, 2012）<sup>(40)</sup>。例えば、Damasio（1994<sup>(41)</sup>, 2003<sup>(42)</sup>）では、無意識から意識までの反応として情動（emotion）と感情（feeling）の概念を導入している。彼は、人が外部から情報を得たとき、意識に先行して起こる身体反応（例えば、心臓の鼓動が早まったり、汗をかいたりする）を情動（emotion）と呼び、情動が強く喚起され意識上に上り、特定の名称（例えば、怒りや悲しみなど）で指示できるようになった状態を感情（feeling）と呼んでいる。そして、人間の意思決定を効率的に動かしているのは、意識前機能の情動であるというソマティック・マーカー（somatic marker）仮説を提唱し、非意識の影響力の強さを論じている。

学校教育では「自尊感情を育む」というコンセプトの下で多くの教育実践が展開されている。しかし、その評価は質問紙を用いたESEの測定を行うに止まっている。また、明確にISEの育成を目標とした教育実践や教育効果評価となるとその前例は非常に少ない（e.g., 山崎, 2013）<sup>(43)</sup>。子どもの健康・適応に対して最適な自尊感情の育成を行うためには、適応的な自尊感情の根幹を担うISEの育成を見据えた教育の展開と、その効果の科学的検証に取り組むことが必要である。

#### 4. 児童用紙筆版自尊感情潜在連合テストの作成と妥当性の検討方法

ISEの測定法としてはIATを紹介してきたが、IATは1人に1台のPCを必要とし、学校教育のシーンで（特に、複数の子どもを対象とした教育効果評価などに）用いることは難しい。集団に対して実施が可能な紙筆版を用いることが適当であると考えられる。しかし、児童を対象としたISEの研究は非常に少なく（Leeuwis, Koot, Creemers, & Lier, 2015）<sup>(44)</sup>、紙筆版ともなると世界においても類を見ない。また、SE-IATは妥当性の面で多くの課題を残す。IATは提示された刺激の分類課題を通して潜在的な連合の強度を測定するという理論で成り立っており、SE-IATもその理論に依拠しているところが大きい。この理論では、設定する刺激によって測定されるISEの性質も左右されると考えられるが、SE-IATの刺激は研究者によってさまざまであり、その差異に関する妥当性の研究

は非常に少ない。本項では、適応的な自尊感情としての ISE の測定を見据えて、SE-IAT の刺激の設定基準を提示するとともに、妥当性の検討方法について言及する。

IAT の刺激がカテゴリーと属性の 2 種類から構成されることは先述の通りである。SE-IAT は、設定される刺激によっていくつかのパターンに分かれる。まず、カテゴリー語の設定に関して、「自己」に関する刺激の設定は欠かせないが、対概念については「他者」に関する刺激を用いるものと用いないものの 2 パターンが存在する。「他者」刺激に関する研究は、Karpinski (2004)<sup>(45)</sup> と Pinter & Greenwald (2005)<sup>(46)</sup> の研究に詳しい。Karpinski (2004)<sup>(45)</sup> の研究では、対概念の「他者」刺激に「サンタクロース」を用いた SE-IAT と「ヒトラー」を用いた SE-IAT で、ISE 数値の比較を行っている。そこでは、「サンタクロース」を用いた SE-IAT の方が、「ヒトラー」を用いたものよりも ISE の数値が低く測定された。IAT は対となる 2 つの概念を対比して、どちらにポジティブ（あるいはネガティブ）な潜在的態度を持っているかを測定するシステムであるため、設定された「他者」刺激に対してポジティブな潜在的態度を持つほど、ISE の得点が低くなる。つまり、対概念に「他者」刺激を設定する SE-IAT は、「自分」に対してポジティブかつ「他者」に対してネガティブな潜在的態度を持つ者ほど ISE 得点が高くなり、「自分」に対してネガティブかつ「他者」に対してポジティブな潜在的態度を持つ者ほど ISE 得点が低くなる。そして、「自己」にも「他者」にもポジティブな潜在的態度を持つ者と、「自己」にも「他者」にもネガティブな潜在的態度を持つ者は、得点が中庸に位置するシステムとなっている。言うなれば、ここで測定される ISE は自己と他者との対比によって表現される潜在的態度であり、他者比較的な潜在的自尊感情が測定されていると考えられる。Deci & Ryan (1995)<sup>(15)</sup> や山崎・横嶋・内田（印刷中）<sup>(38)</sup> の理論にあるように、適応的な自尊感情が自己への有能感のみならず他者との良好な関係性の下で形成されることを鑑みれば、「他者」刺激を対概念に用いる SE-IAT は、適応的な自尊感情の根幹としての ISE の測定とはならない。

こうした観点を考慮すると、対概念に「他者」を用いず単一のカテゴリー（自己）のみで実施が可能なタイプや（e.g., go/no-go association task, Nosek & Banaji, 2001<sup>(47)</sup>; single-category IAT, Karpinski & Steinman, 2006<sup>(48)</sup>; brief implicit association test, Sriram & Greenwald, 2009<sup>(49)</sup>）、多くの人にとって潜在的態度がより中性的な状態（ポジティブでもネガティブでもない状態）にある it や that といった指示語を対概念に設定する SE-IAT (Jordan et al., 2003<sup>(32)</sup>; Zeigler-Hill, 2006<sup>(31)</sup>) を用いることが妥当であると考えられる。紙筆版への表現のしやすさ、児童の IAT への取り組みやすさなどを考慮すると、先行研究において紙筆版（大人）の作成例があり、かつ練習の課題がある 7 ブロッ

ク構成の SE-IAT (e.g., Jordan et al., 2003)<sup>(32)</sup> を参考にすることが妥当であると考えられる。

一方、属性の設定に関しては、研究者の間で統一した知見は見られず、不明な点を多く残す。中には自尊感情とは関連の薄い刺激が設定されることもある（e.g., holiday, cockroach）。しかし、SE-IAT における属性は、自己と連合するポジティブ刺激が ISE の高さを表し、ネガティブ刺激が ISE の低さを表すことから、自尊感情の性質面を表す重要な要素となる。よりの確な自尊感情を表現するためには、自尊感情の高低を表現する感情的刺激を属性に設定することが望ましいと考えられる。そこで、本研究では、Rosenberg の自尊感情尺度に使われている感情語を参考に属性を設定した。Rosenberg の自尊感情尺度で測定される ESE は、意識の影響による社会的望ましさなどの成分が含まれるものの、項目表現そのものは適応的性質（good enough）の自尊感情を測定することを目的として構成されているため、そこで用いられる感情語は自尊感情の高低を表現する感情的刺激に適していると考えられる（例えば、「…自分に満足している」、「自分をもっと好きになれたら…」など）。以上のような観点からカテゴリーと属性の刺激を表 1 のように設定した。なお、紙筆版で IAT を再現するために、刺激はすべて言語刺激で構成した。

表 1 紙筆版 SE-IAT-C の刺激語

カテゴリー語		属性語	
自分	自分以外	快語	不快語
じぶんは	あれは	すぎだ	きらいだ
わたしは	それは	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

次に、妥当性の検討方法である。IAT の測定結果は、具体的な行動との間に有意な関係が報告されていることから（e.g., 喫煙、飲酒、差別行動、判断、同性愛行動など；Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007)<sup>(50)</sup>、ISE においても、ISE の高低に起因する具体的な行動特徴から妥当性を検討する方法が効果的であると考えられる。また、その場合、ISE が構成概念であることを考慮すると、ISE の高低に起因する複数の要因に基づく行動特徴から検討することが望ましい。

まず、高 ISE は適応的な自尊感情の形成に寄与していることが考えられる。また、適応的な自尊感情の概念定義からは、その形成と自律性の高まりに密接な関係があることが論じられている（Deci & Ryan, 1995<sup>(15)</sup>；山崎・横嶋・内田，印刷中<sup>(38)</sup>）。適応的な自尊感情の形成を促す本来性が自律性へ正の関連を持つことも（伊藤・小玉，2006a)<sup>(36)</sup>、これを示唆している。このことから、高 ISE の者には、自律性の高まりと、それに伴う行動特徴が見られると考えられる。一方で、低 ISE の状態は特定の領

域への自己価値の随伴を促し、自尊感情（ESE）を不安定にさせる（Jordan et al., 2003<sup>(32)</sup>；Zeigler-Hill, 2006<sup>(31)</sup>）。そして、先述の通り、そうした随伴性や変動性の高い自尊感情は不安や攻撃性を高めることから（e. g., Kernis et al., 1989<sup>(40)</sup>；Zeigler-Hill et al., 2011<sup>(47)</sup>）、低ISEの者には、不安や攻撃性の高まりと、それに伴う行動特徴が見られると推測される。よって、不安、攻撃性、自律性のそれぞれの要因からくる行動特徴の評定項目を作成することで、ISEの妥当性の検討が行えると考えられる。また、評定の方法としては、児童を対象としていることから、児童との生活時間が長い担任教師へ評定を依頼する方法が効果的であろう。実際に、Standstrom & Jordan（2008）<sup>(51)</sup>では、教師による子どもの攻撃性の評定を行っており、低ISEの子どもはより攻撃的になると報告している。

しかし、教師による児童評定の際には、児童の印象的側面と能力的側面からの影響に留意しなければならない。まず、印象的側面とは、「よい子である」「気が利く子である」といった児童に対する印象である。教師から「よい子」と評価される児童の中には、過剰適応傾向を示す者がいる。過剰適応は随伴性自尊感情を高めて、本来感を低めることが分かっており（益子, 2009）<sup>(52)</sup>、表面的に好印象であっても、脆弱な高い自尊感情や低い自尊感情を内在させている可能性がある。攻撃性などの評定の際、実際は脆弱な高い自尊感情からくる高い攻撃性を持っていたとしても、その印象の良さから、攻撃性は低いと誤った評定が行われる可能性がある。

次に、能力的側面とは、評定に対する児童の運動面や勉強面などの影響を指す。例えば、運動や勉強に限らず、何かしらの能力が高ければ、児童は当然それに依存した自信を持っており、教師もその能力の高さを裏付けとして自信がある子どもと判断する。実際に、教師の児童評定と児童のESE得点が正の相関にあることが報告されている（須崎・兄井, 2013）<sup>(53)</sup>。しかし、こうした特定の領域に依存した自信の評定は随伴性への注視である場合が多く、随伴性の成分を含むESEの高低を予測できたとしても、随伴性と関連を持たないISEの予測には妨げとなる。よって、ISEに関する児童評定を正確に行うためには、児童の印象的側面と能力的側面からの影響に留意しつつ、ISEを要因とした行動特徴を正確に捉えることが必要とされる。そのためには、評定者が正しく評定を行えるように、ISEの概念やそれぞれの行動特徴に精通する者がサポートにつき、評定を実施することが望ましいと考えられる。

以上のような観点を踏まえ、本研究の目的を提示する。本研究では学校教育の場面で使用することを想定した、児童用紙筆版自尊感情潜在連合テスト（Paper and Pencil Version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children; 以下、紙筆版 SE-IAT-C）の開発を行い、信頼性と妥当性の確認を行うことを目的とする。研究1では、学校教育の場

における紙筆版 SE-IAT-C の実施の容易性の検討を行うとともに、平行検査法によって信頼性の確認を行った。また ESE（児童用 RSES）との関係から弁別的妥当性の検討を行った。研究2では、担任教師による児童評定とISE得点との関連から基準関連妥当性の検討を行った。

## 研究 1

### 目的

開発した紙筆版 SE-IAT-C の学校教育の場での実施の容易性を検討するため、SE-IAT-C の課題に対する児童の理解度や、実施時間などの確認を行う。また、SE-IAT のブロック間の相関と得点差を求める平行検査法を用いて、信頼性の検討を行う。最後に、ESE との関連から弁別的妥当性の検討を行う。

### 方法

(1) 児童用紙筆版 SE-IAT-C：本研究の紙筆版 SE-IAT-C は7ブロックから構成され、制限時間の間に刺激語の分類課題（左右の当てはまるマスに○を付ける）を行う。潜在的な連合が強い概念の組み合わせほど正答数（当てはまるマスに正しく○を付けられている刺激語の数）が増え、弱い概念の組み合わせほど正答数は少なくなる。全体の手続きは表2のように進行する（以下、ポジティブは「快」、ネガティブは「不快」と表記する）。ブロック1は（快—不快）の練習課題、ブロック2は（自分—自分以外）の練習課題、ブロック3は（自分・快—自分以外・不快）の組み合わせ課題、ブロック4も（自分・快—自分以外・不快）の2回目の組み合わせ課題、ブロック5は（自分以外—自分）の練習課題、ブロック6は（自分以外・快—自分・不快）の組み合わせ課題、ブロック7は（自分以外・快—自分・不快）の2回目の組み合わせ課題で実施した。ブロック1・2はIAT課題に慣れさせるための練習課題として実施した。ブロック5は逆転したカテゴリー語の位置に慣れさせるために実施した。ブロック3・4は組み合わせ課題であり、ブロック6・7は3・4と逆の組み合わせとなっている。組み合わせ課題の実施順序は参加者ごとにカウンターバランスを取った。各課題の制限時間は、事前の予備調査の結果を踏まえて20秒とした。

表2 紙筆版 SE-IAT-C の手続き

ブロック	内容	詳細	制限時間
1	属性語	快語 — 不快語	20秒
2	カテゴリー語	自分 — 自分以外	20秒
3	組み合わせ1	自分+快語 — 自分以外+不快語	20秒
4	組み合わせ1	自分+快語 — 自分以外+不快語	20秒
5	カテゴリー語	自分以外 — 自分	20秒
6	組み合わせ2	自分以外+快語 — 自分+不快語	20秒
7	組み合わせ2	自分以外+快語 — 自分+不快語	20秒



冊子は児童に実施することを考慮して文字を大きくし、A3用紙を2つ折りにしてA4の冊子状に作成した。教示を行うページと課題を行うページは分けて作成をした。各ブロック課題は見開き2ページに掲載した。見開きの両ページの中央に20項目ずつの刺激語を掲載し、左のページの上段からスタートし、左のページが終わったら右のページの上段から続きを取りかかるとして教示をした(1つのブロックが全40項目)。登場する刺激語の順番に偏りをなくするため、刺激語はくじ引きによってランダムに配置した。12個の刺激語がすべて配置されたら、再度抽選を行い、同じ刺激語を複数回使用した。刺激語の一覧は見開きの左ページの上段に掲載した。ブロック3のサンプル(左ページ)を図1に示す。

測定では、まず課題の説明を行った。ブロック3(組合せ課題)の例を見せ、次のように教示を行った。(1)並んでいることばを、左ページの上から順番に左か右の当てはまるマスに丸をつけてください。(2)例えば、自分を表すことばや良いイメージのことばが出てきたら左に丸をつけ、自分以外を表すことばや悪いイメージのことばが出てきたら右に丸をつけます。(3)制限時間20秒です。間違わないように、出来るだけたくさんのことばに丸をつけてください。

(2) **自尊感情尺度 (RSSES)** : 児童のESEを測定するために、横嶋・内山・内田・山崎 (2016)<sup>(54)</sup>によって作成され、信頼性と妥当性が確認されているRosenberg (1965)<sup>(1)</sup>の自尊感情尺度の児童版を用いて測定を行った。また、各項目は「強くそう思う」から「強くそう思わない」まで、4件法で回答を求めた。なお、本研究での内的整合性は $\alpha=.81$ であった。

#### 調査時期、調査対象ならび調査手続き

調査は2016年2月にT県の小学校2校の4年生～6年生(全20クラス、601名)を対象に実施した。測定は、紙筆版SE-IAT-C、自尊感情質問紙の順番で行われた。紙筆版SE-IAT-Cの実施時間は平均して20分ほどであり、児童の理解度に問題は見られず、実施は円滑に行われた。分析には、紙筆版SE-IAT-Cおよび質問紙に欠損の見られた20名を除く581名(男児281名、女児300名)を用いた。紙筆版SE-IAT-Cは、各ブロックの正答数と誤答数を採点后、ブロック4とブロック7で正答数に対して誤答数が40%を超える調査対象者を欠損として除外した。すべてのデータ分析は統計パッケージIBM SPSS Statistics 23を使用した。

#### 倫理的配慮

学校長および各クラスの担任教師に研究目的、方法等の説明を行った。また、調査用紙の管理は徹底して行い、処理および研究発表の際には学校および個人が特定されることのないよう配慮を行う旨を説明した。児童には、調査の結果が成績に関係しないこと、答えたくないある

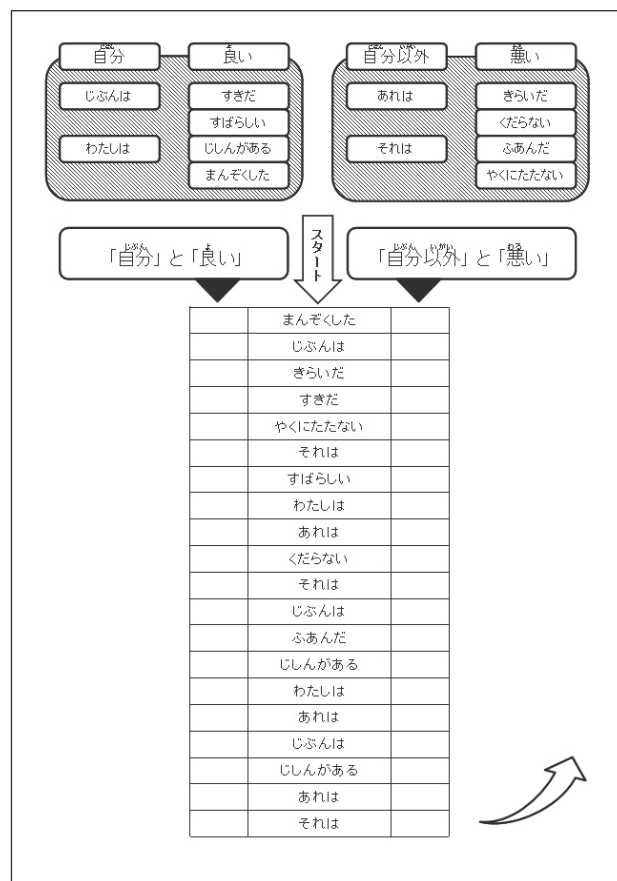


図1 組み合わせ課題(見開き左ページ)

いは体調不良で回答が難しい場合はやめても良いことを伝えた。以上の内容への理解と同意を得て調査を行った。

#### 結果と考察

紙筆版SE-IATの通常の得点化方法に従い、「自分・快—自分以外・不快」の2つの組み合わせ課題の正答数から、「自分以外・快—自分・不快」の2つの組み合わせ課題の正答数を引くことでISE得点を算出した(平均11.32, 標準偏差8.29)。両課題の得点差を求めることにより、潜在的な自己に対する肯定的あるいは否定的な態度を得点に表現することに加えて、分類課題に対する反応速度の個人差を相殺している。

まず、ISE得点の正規性を確認するために、ヒストグラムの作成(図2)とKolmogorov-Smirnovの検定を行った。ヒストグラムはほぼ正規分布の形状を示しているが、正規性の検定は有意であり( $p<.01$ , 歪度.22, 尖度-.22, 最大値35, 最小値-11), 正規分布からのズレが確認されたが、歪度と尖度は正規分布の場合の0から大きく外れてはいなかった。また、IATは潜在連合に偏りがなければ、取り得る得点範囲の中央の値は0となる(自己とポジティブの連合が強ければ正、ネガティブの連合が強ければ負に偏る)。そこで、平均値の偏りを調べるために、中央の値(0)からの差の検定を行った。その結果、ISE得点の平均値は正の方向へと有意に離れていた( $t(580)=32.96, p<.001$ )。得点が正の方向に偏りがあることはJordan, Whitfield, &

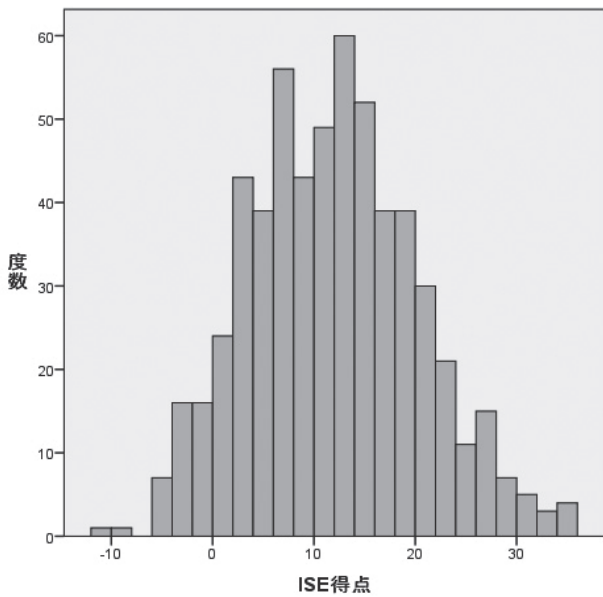


図2 ISE得点のヒストグラム

Zeigler-Hill (2007)<sup>(55)</sup>の示す結果と類似する結果となった。

次に、ISE得点の信頼性を確認するために、各組み合わせ課題の前半同士と後半同士で指標を作成し、両得点に対して *t* 検定と相関を求めた(表3)。指標は、「自分一快」で始まる者であれば、ブロック3(自分一快:1回目)からブロック6(自分一不快:1回目)を引いて組み合わせ課題前半(ISE前半)の指標を作り、ブロック4(自分一快:2回目)からブロック7(自分一不快:2回目)を引いて組み合わせ課題後半(ISE後半)の指標を作った。結果、ISE前半とISE後半の得点に差は見られなかった( $t(581) = -1.12, p > .10$ )。また、ISE前半とISE後半は有意な正の相関を示した( $r = .53, p < .001$ )。この結果は紙筆版 SE-IAT-Cの組み合わせ課題の測定値の安定度を示しており、信頼性の一部を示す結果を得られたと考えられる。

また、ESEとISEの関連を調べるために、相関係数を算出した。結果、有意な相関は見られなかった( $r = .04, p > .10$ )。これは先行研究の結果と一致し(Jordan et al, 2003<sup>(32)</sup>; Zeigler-Hill, 2006<sup>(31)</sup>)、弁別的妥当性の一部を示

表3 ISE前半およびISE後半の得点差の検定と相関係数

ISE前半		ISE後半		<i>t</i> 値 ( <i>df</i> =581)	相関係数
平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>		
5.55	4.47	5.76	5.01	<i>n.s.</i>	.53***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , *n.s.* = not significant

す結果が得られた。

最後に、学年および男女の平均値の差を検証するために、独立変数を性別(男女)と学年(4, 5, 6年)、従属変数をISEとする2要因の分散分析を行った(表4)。分散分析の結果、性の主効果は見られなかった( $F(1, 581) = .18, n.s.$ )。また、学年は主効果が有意となったため( $F(2, 581) = 5.94, p < .01$ )、Bonferroniの検定を用いて多重比較を行ったところ、4年生(平均値10.02)と6年生(平均値12.66)の間に有意な差が見られた( $p < .01$ )。この結果からは、高学年になるほどISE得点が増える傾向にあることが示されたが、今後の研究で再現性などを確認する必要があると考えられる。

## 研究2

### 目的

研究2では、担任教師による児童評定とISE得点との関連から基準関連妥当性の検討を行った。

### 方法

(1) 評定対象候補の選出: ISE得点の上位および下位の者から各30人を評定対象者候補として選定した。対象の得点範囲は、上位が26点~35点、下位が-2点~-11点であった。上位の26点と下位の-2点には同点者が複数いたため、評定対象に含めた。最終的に、上位34名(男子20名、女子14名)、下位38名(男子17名、女子21名)を評定対象者候補とした。

(2) 教師による児童評定の基準と項目: 自尊感情に関する先行研究を基に、ISEが低い者の特徴である「不安」と「攻撃性」、ISEが高い者の特徴である「自律性」から

表4 ISE得点の男女別、学年別の平均値および標準偏差と得点差の検定

		学年						主効果		
		4年生		5年生		6年生		性 <i>F</i> 値( <i>df</i> =1/581)	学年 <i>F</i> 値( <i>df</i> =2/581)	交互作用 <i>F</i> 値( <i>df</i> =2/581)
		平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>			
ISE	男子	10.44	7.25	10.60	8.82	13.22	8.91	.18	5.39**	.82
	女子	9.59	7.75	11.56	7.84	12.23	8.59			
	全体	10.02	7.49	11.07	8.32	12.66	8.73			

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

*n* = (4年生:男子93名,女子91名, 5年生:男子95名,女子89名, 6年生:男子93名,女子120名)

多重比較の結果(Bonferroni): 6年生 > 4年生



評定項目を作成した。項目1は「不安」に関する行動特徴として「友だちや先生の目を気にすることが多い」とした。項目2は「攻撃性」に関する行動特徴として「友だちに対して、気分を害することが良くある」とした。項目3は「自律性」に関する行動特徴として「まわりに流されず、やりたいことを楽しそうにやっていることが多い」とした。各項目とも、「まったく当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」まで、7件法で回答を求めた。各項目の表現は、誤解がある可能性を考慮しながらも、なるべく多くの教員に評定を依頼するため短時間で実施が可能なシンプルな項目で設定した。誤解に対する配慮は、評定用紙に回答を求める際の教示で、各項目について補足説明を行うことで対処した。項目1については、「不安な感情から周囲の目を気にしやすいかどうかである」と説明した。項目2については、「友だちに対する嫌悪や怒りなど、攻撃的な気持ちを抱きやすいかどうかである」と説明した。項目3については、「1人であっても、友だちといっても、主体的に自分のやりたいことができているかどうかである」と説明した。また、児童の能力的側面から来る印象を減らすために、「勉強や運動がよくできる、できないは一切考慮せずに各項目に答えてください」と教示を行った。

ISEと設定項目の関連は次のような仮説に基づく。まず、ISE得点の高い者ほど、項目1および項目2の不安や攻撃性に基づく行動は当てはまらず、項目3の自律性に基づく行動は当てはまると評定されると予想される。一方で、ISE得点が低い者は、上記の逆の結果が得られると考えられる。

**(3) インタビューによる評価内容の確認と修正：**調査は正確な児童評定を試みるために、ISEの概念やそれぞれの行動特徴に精通する者がサポートにつき、半構造的インタビューの形式で行われた。インタビューの際の供述で、教師の評定の判断基準と項目の意図する基準に齟齬が見受けられた場合は、再度説明をし、評定の再考を求めた。齟齬に対する判断基準は、主に次の2点を基準とした。まず、項目表現に関する簡単な齟齬である。例えば、項目1（不安）を「当てはまる」と答え、具体的な様子について「先生のことでも良く手伝ってくれて、周りの友だちにも気遣いができる」と答えた場合は、「友だちや先生の目を気にすることが多い」の項目表現に誤解が生じていると判断した。そして、「その行動が児童の不安感情から来ている様子であったか」などを確認し、「不安な様子とは違った」と教師が答えた場合、再度項目に関する教示の内容を説明した上で、評定の再考を求めた。また、運動や勉強ができる、あるいは態度が良いことからくる影響を強く感じた場合である。例えば、項目2（攻撃性）を「当てはまらない」と答え、具体的な様子について「運動も勉強もできて、先生の言うこともよく聞く良い子だっ

た」と答えた場合、児童の印象的側面や能力的側面の影響を受けている可能性があると判断した。そして、「先生の前だけでなく、その子の日常生活全般を通して、友だちに対する嫌悪や怒りを感じているような様子は見受けられなかったか」などを確認し、「先生の前で直接的なトラブルはなくとも、周囲からそういった様子を聞いたことは多々ある」といったように教師が答えた場合、再度、運動や勉強の出来やそこから来る印象は考慮にいれないことをお願いし、評定の再考を求めた。

#### 調査時期、調査対象ならびに調査手続き

調査は2016年4月に徳島県の小学校の教員を対象に行なった。研究1の調査の際に4年生～6年生を担当していた担任教師の中から、インタビュー協力を得られた7名を対象に実施した。評定対象候補としていた児童の中から、7名の教員が担任をしていた児童を最終的な評定対象とした。評定対象の数はISE上位が12名（男児4名、女児8名）、ISE下位が11名（男児8名、女児3名）の計23名となった。教師1人あたりの評定児童数は平均して3.2名であった。評定のサポートにつく際に調査者の見解が介入しないように、調査者は対象児童の特徴やISE得点を事前に把握していない状態で調査を実施した。また、評定を行った教師は児童のISE得点を把握していない状態でインタビューを行った。調査時間は、教師1人あたり20～30分であった。最初に、調査概要および各項目の説明を行った。次に、児童評定用紙に回答を求めた。最後に、調査対象者にインタビューの形式で各項目について具体的な児童の行動の様子を聞いた。その際、評定を行う際の教師の判断基準と項目の示す意図に齟齬があった場合は、再度説明をし、評定の再考を求めた。また、すべてのデータ分析は統計パッケージIBM SPSS Statistics 23を使用した。

#### 倫理的配慮

学校長および各クラス担任の教師に研究目的、方法等の説明を行った。調査日は、学校および担任教師への負担の少ない時間帯および希望日を指定してもらった。調査場所は学校の会議室を使用させてもらった。聴取したインタビュー内容および児童に関するデータの管理は徹底して行い、処理および研究発表の際には学校および個人が特定されることのないよう配慮を行う旨を説明した。以上の内容の理解を得て、研究参加の同意を得た。

#### 結果と考察

担任教師による児童評定の各項目の得点および項目の合計得点における、ISE得点の上位児童と下位児童の平均値の差を求めた。 $t$ 検定の結果、項目1は、上位児童（平均値2.58）と下位児童（平均値6.09）の間に有意な差が見られた（ $t(21) = -6.53, p < .001$ ）。項目2は、上位児童（平均値2.42）と下位児童（平均値5.36）の間に有意な差が見られた（ $t(21) = -4.35, p < .001$ ）。項目3は、上位児童

(平均値 5.25) と下位児童 (平均値 3.00) の間に有意な差が見られた ( $t(21) = 4.80, p < .001$ )。平均値と標準偏差および有意差の検定結果は表 5 に示す。

以上の結果から、ISE 得点が高いほど、教師は児童に対して攻撃性や不安を表す行動が少ないと評定し、自律的行動が多いと評定した。この結果は、ISE の特徴を示す先行研究の知見と一致し、紙筆版 SE-IAT-C の基準関連妥当性の一部を示す結果を得られたと考えられる。

表 5 担任教師による児童評定に対する ISE 上位児童と下位児童の得点差の検定

	ISE上位 ( $n = 12$ )		ISE下位 ( $n = 11$ )		t値 ( $df=21$ )
	平均	SD	平均	SD	
項目1 (不安)	2.58	1.50	6.09	1.04	-6.53 ***
項目2 (攻撃性)	2.42	1.67	5.36	1.56	-4.35 ***
項目3 (自律性)	5.25	1.05	3.00	1.18	4.80 ***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 総合考察

本研究は、開発した児童用紙筆版 SE-IAT-C の信頼性および妥当性を検討することを目的として実施された。

研究 1 では、ISE の平均値が先行研究と同様に正の方向へと偏っていることが見られた。そして、ISE 前半と ISE 後半の平均値の差はなく、かつ有意な正の相関を示したことから、平行検査法による信頼性が示された。最後に、ESE と無相関であったことも、先行研究 (Jordan et al., 2003<sup>(32)</sup>; Zeigler-Hill, 2006<sup>(31)</sup>) と一致し、弁別的妥当性を得ることができた。

一方で、ISE と ESE が無相関である結果は 1 つの疑問を提示する。Rosenberg は外的基準や他者との比較といった成分を含まないものとして自尊感情を定義しているが、この結果は彼の意図した定義に反して外的基準や他者との比較といった随伴成分をより強く反映する尺度となっている可能性を示唆している。もし、彼の定義通りの尺度であれば、適応的な自尊感情の性質を持つと考えられる ISE とは多少なりとも相関を示すと考えられる。実際の尺度項目に目を向けると、多くは彼の定義の通りの内在化された自己の価値を問う質問によって構成されているが、一部には外的基準や他者との比較を想起させる項目も含まれている (e.g, I feel that I'm a person of worth, at least on an equal plane with others)。邦訳版の尺度も同様であり、Rosenberg の自尊感情尺度によって測定された自尊感情は、そうした側面も包括した全般的な自尊感情概念が測定されてきたと考えられている (伊藤・小玉, 2005<sup>(34)</sup>; 近藤, 2010<sup>(56)</sup>)。Kernis らがやってきた自尊感情の変動性の研究では Rosenberg の尺度が使用されていたが、そこにおいて不安定な自尊感情が検出されているのも、こうし

た尺度の持つ随伴性の成分が反映されているものと考えられる。しかし、そうであったとしても、Rosenberg の尺度は、本当の自尊感情 (あるいは本来性) の成分も含んでいるとされていることから (伊藤・川崎・小玉, 2011)<sup>(57)</sup>、ISE との相関を得られないことへの疑問は解消されない。

次に考えられるのは、測定法の方法論からの可能性である。Bosson et al. (2000)<sup>(30)</sup> では、複数の潜在的態度の測定法の精度を比較するなかで、同様の認知プロセスを頼りにする測定法は、多少なりともお互いにより高い相関を示す傾向にあることを明らかにしている。これは、質問紙法も同様で、質問紙によって測定された変数同士には共通のエラーが存在し、そのエラー同士が関連を見せている可能性である。今回のように、まったく異なる測定方法を用いると、そうしたエラー同士の関連は消失するため、両者の相関も出にくくなる。また、人の意識 (認知・思考) のプロセスがもたらす影響も推測される。山崎・内田・横嶋・内山 (2016)<sup>(58)</sup> では、自記式の質問紙で抽出できるのは本人が意識上で気づけているごく僅かな意識側面であると考えられている。つまり、記憶に残りやすい明確な結果や成果に基づく感情ほど内省による検索にかかりやすく、質問紙などの評定の際の拠り所にされやすいと推測される。そうした記憶や感情は、外的基準や他者との比較に基づくものであると考えられることから、質問紙はより随伴性の強い自己価値の感情を測定する傾向にあると推測される。こうした要因を背景に、ESE と ISE は無相関を示した可能性が考えられる。Rosenberg の尺度は 10 項目と使いやすいため、多くの研究で使用されているが、尺度が必ずしも彼の想定した概念を反映しきれていない点に留意し、その性質を理解した上で得点の解釈を行わなければならない。そして、こうした観点は、質問紙を用いた心理研究全般に対して警鐘される問題であろう。

次に、研究 2 では、高い ISE を持つ児童は、教師から不安が低く、攻撃性が低く、自律性が高いと評定される傾向にあり、低い ISE を持つ児童はその逆の評定をされる傾向があることが明らかとなった。本研究では、ISE を適応的な本当の自尊感情の根幹を担う特性であると位置づけて研究を行ってきたが、教師による児童評定は、そうした ISE の高低に起因する行動特徴と一致し、基準関連妥当性の一部を示す結果を得られたと考えられる。また、実際の児童評定後のインタビューの様子についても触れておきたい。そこでは、評定者によって想起する場面に差異が見られたことである質問項目に対する直接的なエピソードよりも、児童に対する印象的側面や (落ち着いた良い子であるなど)、能力的側面 (勉強・運動ができるなど) が強調されている場合が比較的多く見られた。これは、印象的側面や能力的側面が児童のイメージとして強く残りやすいことを示している。今回は、これらの

影響を減らすために半構造的インタビューの導入を試みたが、他者評定による ISE の妥当性の検討には、印象的側面や能力的側面からの影響因に留意することが重要になると考えられる。また、実際の学校場面では、こうした要因に隠れて、子どもが抱えている心の奥底の不安を見落としてしまう可能性を示唆している。印象や能力も児童の成長には大切な要素であるが、子どもの行動の背景にある心の状態に目を向けることが、子どもの健康で適応的な成長をサポートするために重要な要素になる。

最後に、本研究の課題と展望について述べる。本研究では、組み合わせ課題の得点を分割し、得点差や相関を求める平行検査法を用いることで信頼性の検討を行ってきたが、今後は時期を空けた再検査法を用いて信頼性の検討を行う必要がある。また、他の潜在的指標あるいは顕在的指標との関連や他者評定や仲間評定、実験等による更なる妥当性の検討を重ねていくことが必要であると考えられる。特に、他者評定や仲間評定、実験を用いた妥当性の検討は重要である。IAT の妥当性は設定した刺激同士の潜在的連合を測定するという理論上、設定する刺激語によって測定される ISE の性質は異なると推測される。どのような刺激語を設定することで、ISE のどのような側面が測定されるのか、そして、それが人の健康や適応とどのような関連を見せるのか、今後の研究で明らかにしていく必要があるだろう。最後に、本研究の最大の目的は、作成された紙筆版 SE-IAT-C の測定ツールを学校教育の場で教育効果評価に用いることにある。今後は教育実践の効果評価の測定などに使用し、健康や適応にとって最適な本当の自尊感情を育むための、より効果的な教育方法の創造へと活用していきたい。

#### 一 注 一

1 意識領域と非意識領域の弁別については、研究者によって見解が分かれる。本論文では、先行研究の表現に沿って「潜在的態度」や「無意識」という用語も用いているが、これらは意識外にある機能として重複する部分が多いため、「非意識」という単語を総称として使用している。しかし、近年では Damasio (1994<sup>(41)</sup>, 2003<sup>(42)</sup>) や山崎ら (2016)<sup>(58)</sup> のように、人の意識から無意識に至るまでの構造を詳細に論じている研究も多い。それらの観点を踏まえ、意識と非意識を二面性で捉えるだけでなく、各機能についての弁別理解および研究が必要であることも付記しておきたい。

#### 一 文 献 一

- (1) Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-Image*. Princeton University Press, 1965
- (2) 沢崎達夫「自己受容 (グッドイナフ) は向上心を弱めるか」『児童心理』910, pp.62-32, 2010

- (3) Schmitt, D. P., & Allik, J. Simultaneous administration of the rosenberg self-esteem scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, pp.623-642, 2005
- (4) Tennen, H., & Herzberger, S. Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, pp.72-80, 1987
- (5) Diener, E. Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, pp.542-575, 1984
- (6) Davies, J. & Brember, I. Reading and mathematics attainments and self-esteem in Years 2 and 6 - an eight-year cross-sectional study. *Educational Studies*, 25, pp.145-157, 1999
- (7) 東京都教育委員会「自尊感情や自己肯定感に関する研究について」2013  
<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/soumu/choho/598/page5.htm> (検索 2016 年 5 月 1 日)
- (8) Kernis, M. H. Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, pp.1-26, 2003
- (9) Goldman, B. M. Making Diamonds out of coal: The role of authenticity in healthy (optical) self-esteem and psychological functioning. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers*, New York: Psychology Press, pp.132-139, 2006
- (10) Kernis, M. H., Grannemann, B. D., Barclay, L.C. Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, pp.1013-1023, 1989
- (11) Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, pp.80-84, 1991
- (12) Greenier, K., Kernis, M.h, McNamara, C.W., Waschull, S.B., Berry, A.J., Herlocker, C.E., & Abend, T.A. Individual differences in reactivity to daily events: Examining the roles of stability and level of self-esteem. *Journal of Personality*, 67, pp.186-208, 1999
- (13) Kernis, M. H., Cornell, D. C., Sun, C. R., Berry, A., & Harlow, T. There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, pp.1190-1204, 1993
- (14) Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L.C. Stability of self-esteem: Assessment, correlates, and excuse making. *Journal of Personality*, 60, pp.621-644, 1992
- (15) Deci, E. L., & Ryan, R. M. Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum. pp.31-46, 1995



- (16) Crocker, J., & Wolf, C.T. Contingencies of Self-Worth. *Psychological Review*, 108, pp.593-623, 2001
- (17) Zeiger-Hill, V., Besser, V., & King, K. Contingent self-esteem and anticipated reactions to interpersonal rejection and achievement failure. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 30, pp.1069-1096, 2011
- (18) Vonk, R., Smit, H. Optimal self-esteem is contingent: Intrinsic versus extrinsic and upward versus downward contingencies. *European Journal of Personality*, 26, pp.182-193, 2012
- (19) Campbell, J.D., Trapnell, P.D., Heine, S.T., Katz, I.M., Lavallee, L.F., & Lehman, D.R. Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, pp.141-156, 1996
- (20) Kernis, M. H., Whisenhunt, C.R., Waschull, S. B., Greenier, K. D., Berry, A. J., Herlocker, C. E., & Anderson, C. C. Multiple facets of self-esteem and their relations to depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, pp.657-668, 1998
- (21) Paulhus, D. L. Sphere-specific measures of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, pp.1253-1265, 1983
- (22) Fazio, R. H., & Towles-Schwen, T. The MODE model of attitude-behavior processes. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford Press. pp.97-116, 1999
- (23) 谷伊織「バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討」『パーソナリティ研究』17, pp.18-28, 2008
- (24) Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, pp.4-27, 1995
- (25) Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, 109, pp.3-25, 2002
- (26) Egloff, B., & Schmukle, S. C. Predictive validity of an implicit association test for assessing anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, pp.1441-1455, 2002
- (27) 藤井勉・上淵寿「紙筆版 IAT を用いた自尊心査定を試み」『東京学芸大学紀要』61, pp.113-120, 2010
- (28) 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦「潜在的・顕在的自尊心感情と仮想的有能感の関連」『パーソナリティ研究』17, pp.250-260, 2010
- (29) Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, pp.1022-1038, 2000
- (30) Bosson, J. K., Swann, W.B., & Pennebaker, J.W. Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, pp.631-643, 2000
- (31) Zeigler-Hill, V. Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability. *Journal of Personality*, 74, pp.119-144, 2006
- (32) Jordan, C.H., Spencer, S.J., Zanna, M.P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, pp.969-978, 2003
- (33) Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. "I love me ... I love me not" : Implicit self-esteem explicit self-esteem, and defensiveness. In S. J. Spencer, S. Fein, M. P. Zanna, & J. M. Olson (eds.) , *Motivated social cognition: The Ontario symposium* (Vol. 9, pp. 117-145) . Mahwah, NJ: Erlbaum.
- (34) 伊藤正哉・小玉正博「自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討」『教育心理学研究』53, pp.74-85, 2005
- (35) 伊藤正哉・小玉正博「自分らしくある感覚 (本来感) に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討」『健康心理学研究』19, pp.36-43, 2006b
- (36) 伊藤正哉・小玉正博「大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に着目して—」『教育心理学研究』54, pp.222-232, 2006a
- (37) Moller, A. C., Friedman, R., & Deci, E. L. A self-determination theory perspective on the interpersonal and intrapersonal aspects of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.) , *Self-esteem: Issues and answers*, New York: Psychology Press, pp.132-139, 2006
- (38) 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子「『セルフ・エスティーム』の概念と測定法の再構築—セルフ・エスティーム研究刷新への黎明—」『鳴門教育大学研究紀要』(印刷中)
- (39) Zeigler-Hill, V., & Jordan, C. H. Two faces of self-esteem: Implicit and explicit forms of self-esteem. In B. Gawronski & B. K. Payne (Eds.) , *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications*. New York: Guilford Press, pp.392-407, 2010
- (40) Mlodinow, L. 水谷淳訳『しらずしらず—あなたの9割を支配する「無意識」を科学する』ダイヤモンド社, 2013 (Mlodinow, L. *Subliminal: How your unconscious mind rules your behavior*. New York: Pantheon Books, 2012)
- (41) Damasio, A. R. 田中三彦訳『デカルトの誤り—情動, 理性, 人間の脳』ちくま学芸文庫 (新訳文庫版) , 2010 (Damasio, A. R. *Descartes' error: Emotion, reason,*

- and the human brain. New York: Putnam, 1994)
- (42) Damasio, A. R. 田中三彦訳『感じる脳』ダイヤモンド社, 2005 (Damasio, A. R. *Looking for Spinoza: Joy, sorrow and the feeling brain*. New York: Harcourt, 2003)
- (43) 山崎勝之「なぜ、これまでの教育が通用しないのか」予防教育科学センター編『予防教育科学に基づく「新しい学校予防教育」(第2版)』鳴門教育大学, pp.49-63, 2013
- (44) Leeuwis, F.H., Koot, H.M., Creemers, D.H.M., & Lier, P.A.C. Implicit and explicit self-esteem discrepancies, victimization and the development of late childhood internalizing problems. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 43, pp.909-919, 2015
- (45) Karpinski, A. Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, pp.22-34, 2004
- (46) Pinter, B., & Greenwald, A. Clarifying the role of the “other” category in the self-esteem iat. *Experimental Psychology*, 52, pp.74-79, 2005
- (47) Nosek, B.A., & Banaji, M.R. The go/no-go association task. *Social Cognition*, 19, pp.625-664, 2001
- (48) Karpinski, A. & Steinman, R.B. The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, pp.16-32, 2006
- (49) Sriram, N., & Greenwald, A.G. The brief implicit association test. *Experimental Psychology*, 56, pp.283-294, 2009
- (50) Lane, K.A., Banahi, M.R., Nosek, B.A., & Greenwald, A.G. Understanding and using the implicit association test:IV : Procedures and validity. In B. Wittenberink & N. Schwarz (Eds) , *Implicit measures of attitudes: Procedures and controversies*. New York: Guilford Press, pp.59-102, 2007
- (51) Sandstrom, M.J., Jordan, R., Defensive self-esteem and aggression in childhood. *Journal of Research in Personality*, 42, pp.506-514, 2008
- (52) 益子洋人「青年期における過剰適応傾向に関する研究—外的適応行動と自己価値の随伴性, 本来感との関連—」『明治大学文学研究論集』30, pp.243-251, 2009
- (53) 須崎康臣・兄井彰「小学生と中学生を対象にした Rosenberg における自尊感情尺度の妥当性, 信頼性及び因子構造の検討」『日本生活体験学習会誌』13, pp.93-98, 2003
- (54) 横嶋・内山・内田・山崎「児童用の Rosenberg 自尊感情尺度の再作成—項目の修正と教師による児童評定を用いた妥当性の検討—」『教育心理学会ポスター発表』(発表予定, 2016)
- (55) Jordan, C.H., Whitfield, M., & Zeigler-Hill, V. Intuition and the correspondence between implicit and explicit self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, pp.1067-1079, 2007
- (56) 近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践』金子書房, 2010
- (57) 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博「自尊感情の3様態—自尊源の随伴性と充足感からの整理—」『心理学研究』81, pp.560-568, 2011
- (58) 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・内山有美「無意識と意識, そして, インプリシット心的特徴」『鳴門教育大学研究紀要』31, pp.1-18, 2016

